鳥海山ハイキング（S治）

2018年9月23日（日） 快晴

メンバー　S治、I橋、I島、（沢隊：T野、I崎、A原、S田石）

鳥海山は3回目だが、過去2回は山スキーだったので、無雪期は初めてだ。最近は、無雪期のハイキングの良さに目覚めて、今回も2人の同志を得て、はるばる鳥海山を登ることができた。

1 日目に沢隊の 4 人と一緒に万助小屋に入り、2 日目に鳥海山を往復して、3 日目に下山する計画だ。コースタイムによれば万助小屋からの鳥海山往復は 7 時 45 分なので、日帰りの快適ハイキングを予想していた。

仙人平からの眺め

水平の木道

文殊岳から鳥海山

朝 6 時前に薄暗い中、万助小屋を出発した。しばらく歩くと山道が水たまりのようになり、水たまりを避けて歩くのは登山靴で沢を登っている気分だ。

途中草原なところがあり、やっと休めるところに出た。エアリアマップによればここがドッタリのようだ。語源はなんだろう。やがて仙人平に出ると視界が開けてきて、ようやく日が昇り、湿原をふくむこぶこぶの草原がとっても気持ちよさげに見えた。
景色が見えるとがぜん元気がでる。前鍋のピークを捲くように登ると鳥海湖に出た。お浜小屋のテラスが素敵だときいたが、それは下山の楽しみとして、すこし戻って水平の木道を歩く。この辺りは全面草原で秋の風も涼しくすこぶる気持ちがいい。
七五三掛までくると鳥海山が間近に見える。文殊岳、伏拝岳、行者岳とピークを登るごとに視界が広がり鳥海山が近づく。頂上のあたりは雲がかかっていたので、真っ白で視界の聞かない山頂は魅力ないので、途中で引き返すつもりで登っていたら、どんどん雲が晴れていった。

ここまで、コースタイムの 5 割増しのペースなので、そろそろ時間切れになりそうだったが、雲を取り払って輝くような山頂に魅せられて、どんどん登る気になる。

七高山の頂

七高山を登ったところで、I 橋さんは新山には行かないと主張した。なんでも前回登った時、山頂付近の玉石ゴロゴロに悩まされ、とても怖い思いをしたそうだ。
しかし、山頂近くに玉石ゴロゴロなんて聞くと屋久島の稜線を思い出し、どんな奇景が見られるのかと返って興味を

そそられ、時間がおしているにもかかわらず、登ってみることにした。神社で待つＩ橋さんと別れ、Ｉ島さんと二人で新山の頂を目指した。

新山の頂

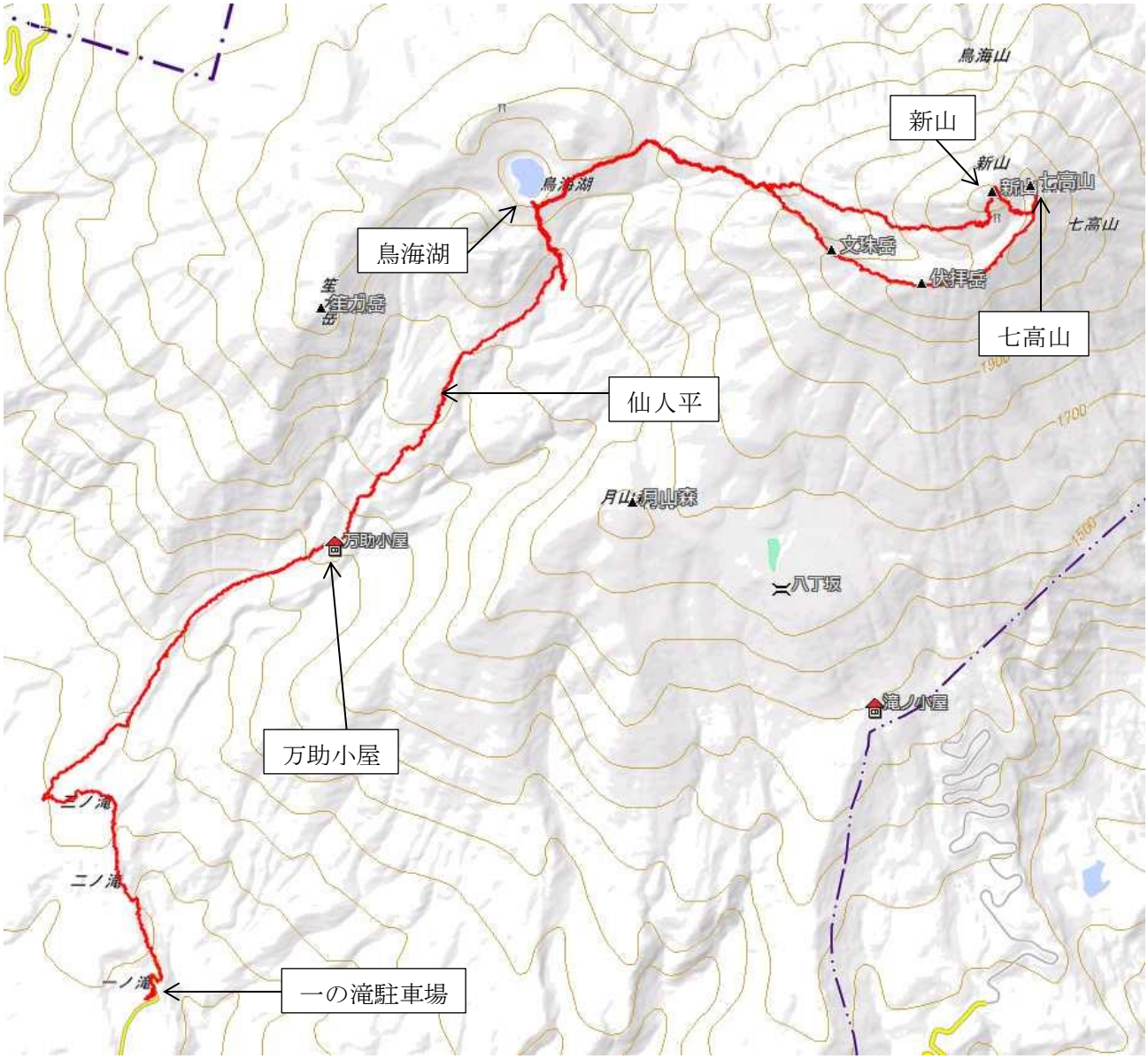
玉石ゴロゴロ

途中までは普通のガレ場だったが、山頂近くは玉石ではなく巨大ながれきが折り重なって、クライミングの雰囲気だ。なるほどこれかと思いながら足を運んだ。山頂はとても狭い岩のピークだった。
下山も巨大ガレの下りだ。神社にお参りしたＩ橋さんと合流して、千蛇谷にそった道を下り初めてそうそうに事故にあった。

先頭を歩いていた佐治が突然左の谷川に転倒し、斜面を頭から滑落した。目撃したＩ橋さんによれば、左手にもっていたストックが岩に引っかかって引っ張られたらしい。Ｉ島さんの悲鳴が聞こえた。「佐治さん、岩、岩」。意識して前方を見ると岩が見えた。そこから無意識に回転して、岩の上１ｍぐらいのところで足を下にして停止した。岩の位置が転倒したところだったら、重大事になっていたところだ。
そのときは気づかなかったが、歩いているうちに左ひじの下をすりむいていることが分かって、立ち止まり傷口を水で洗い、しばらく歩いて乾かしたのち液体ばんそうこうで手当てした。最近は消毒薬をつかわないのがいいらしい。

千蛇谷を下って、稜線に戻るあたりで休憩して、昆布茶と非常食の羊羹を食べた。8 時間弱の行動のつもりが、すでに 9 時間歩いていて、行動食が尽きてしまった。塩分とカロリーの補給だ。
鳥海湖の分岐から、日暮れを意識して、急いでくだっていたら、ついうっかり仙人平の分岐を間違え、15 分ほどロスした。このロスがなければぎりぎりヘッドランプを出さなくてすんだだろうか。
仙人平からの劣悪な登山道を下ってもうすぐ小屋というところで、ヘッドランプをつけた。そして 15 分、沢隊の仲間が迎えに来てくれた。小屋に到着だ。仲間との再会って、なんだかとっても暖かく感じてうれしい。この晩は泊り客が我々意外になく、小屋は貸し切り状態で、思いっきり騒げる状況だったが、体が休憩を欲していて、早めに寝ることにした。

初めての無雪期の鳥海山、とってもすてきで、しかも全力を尽くした感じで、充実感いっぱいでした。鳥海山はルートが沢山あるようなので、また機会をみて来たいと思いました。



コースタイム
9 月 23 日
万助小屋発(5:40)～鳥海湖(8:35)～文殊岳(11:10)～七高山(12:15)～新山(13:00)～鳥海湖(15:50)～万助小屋(18:10)